



「小児がんの子どもたちを救って」

気骨あふれる人生 別府市 渡邊 勅允さん



「小児がんの子どもたちを救ってほしい」と、JCCG（日本小児がん研究グループ）に昨年9月、高額のご寄付をくださった別府市の渡邊勅允（ときまさ）さんが、6月に逝去されました。（享年84歳）

渡邊さんは「子どもたちのことが一番」が信念。寄付にあてたのは、若い頃から贅沢をせずこつこつと貯蓄したお金だそうです。

新聞報道で、2014年に小児がん治療を推進する目的で JCCG が結成されたが研究資金が十分でない現状を知り、「未来のある子どもたちが難病に苦しむのに支援が行き届かないことには憤りを感じる」と寄付を決意されました。

寄付目録と感謝状を交わした水谷修紀理事長は、「武士のごとく気骨にあふれた稀有な方」と渡邊さんの精神に感銘を受けたと言います。

渡邊さんへの敬意と感謝を込め、改めてその凛とした生き方を紹介します。

「子どもたちのために」



「小児がん」500万円寄付 渡邊さん 別府 研究グループへ

「小児がんの子どもたちを救って」と、別府市の渡邊勅允（84）さんが、500万円を日本小児がん研究グループ（JCCG）へ寄付した。9日、自宅を訪問した同グループの水谷修紀理事長らが感謝状を贈った。今回の寄付で、標準治療に加え、多量にある小児がん患者は早く大人数の患者の治療向上につながるを期待されている。

強い思いを 各紙も報道



西日本新聞

大分合同新聞

毎日新聞

JCCG Press 第4号



1933 年生まれ。
医師を志した時もあったという。ご自宅には病気に関する専門書が並び、医学知識も豊富。日本の小児がん医療体制には鋭い質問を。



「これからの子どもたちのことが一番大事なのは誰でもわかること。支援が不十分なのはどういうことか」「子どもたちのためなら何だってしてやりたい」



ご夫婦ともに教職。現役最後の頃は障害児の教育問題にも熱心に取り組み「Children first」を貫く。教員生活の中でコツコツ貯蓄を。



「葬儀にお金をかけるくらいなら子どもたちのために使うように」生前のご本人の意思を継ぎ、葬儀は質素に親族のみでとり行われた。「子どもたちを第一に」を実践する教育者であり続けた。



奥様の昭子さんと。

小児医療の支援不足など医療体制の問題に切り込む際のシャープさとは対照的に、子どもたちの話になると一気に柔和な表情に。

「病気の子どものきょうだいが富士山に登って楽しめた、というニュースを知ると、心から『ああ、よかった』と思いますよ」。そう話してくださった時の笑顔が印象的です。

JCCG も子どもたちの笑顔のために、一層の治療研究推進に努めることを約束しました。



どこまでも子どもたちのことを考えておられた渡邊さんの優しく大きなお心は、穏やかに広がる別府湾と重なります。

その精神を、JCCG はグループ皆で受け継いでいきます。